

東牖子

洋学文庫
文庫8
C 242
1



東牖子

東牖子序

馬田昌調撰

天下之言有真者有偽者有正者有邪者有一而二者有二而一者有同而異者有異而同者或有古今舛訛者或有華夷混淆者故口能言而心不得者其類至多自非極其根株窮其窟穴無有能得其正真而不鑿者

也然世之鹵莽多因循於表偽
 乖謬者怡然不疑甚則薰蕕不
 辨淄澠無別省合流蕩正真遂
 泯焉告子所謂無得於言不求
 於心者蓋復多矣友人田仲宣
 學通今古識達華夷言論精確
 皆有明證實極根株窮窟穴能
 得其正真而不筮者不與夫世

之鹵莽無得於言不求於心者
 侔矣頃者錄其平素所言論若
 千條釐為五卷名曰東牖子來
 乞序其首仲宣於此書蓋其緒
 餘予恐後人誤以此書槩仲宣
 故不敢峻拒題以數字
 享和壬戌之冬



東牖子序

彈論習俗辨名萬物其書不為鮮矣
大抵言偽而辨記醜而博奈惑世怪
民何仲尼曰小辨害義小言破道可
不慎與友人田仲宣宿學篤志該通
古今則雖瑣言片辭未嘗欺人於是
輯錄東牖子而擣其弊釐為五卷謁
序於余曰不亦善哉迷復不遠物

之常理世稱立言家者譬諸枕上片
夢東西易嚮不知其非此書一出猶
如日色之照東牖而寢語昏迷頓寤
斯實東牖子哉仲宣含晒而拜遂為
之序云享和改元辛酉之秋

桐江



月叙

昔者區稚圭之於庸作甯越之於
 苦耕猶不能無不幸而後身空乏
 而涉世如此其汚也而身穢之何
 則此能士之所耻也 余常為書肆
 奮書以佐資用竊讀彼書有年于
 此雖吾之策見乎所謂尺有所短

寸有所長乃隨而筆為斯冊子其
 命東牖子者則 余平素深筆於東
 牖下已嚮太陽升朝露也已而每
 朝之思之至焉此無感慨夫物或
 失所或誤真難滑稽伎術秘變
 之事此不無也其其諸藝文者自
 未深考訛說雷同風俗移人或為

名或為貨英雄欺人耳余夙有感
匡寧之所為餘力以每篇東牖
子於盧樞菴終冠蓋辭於卷首云
享和紀元歲次辛酉仲冬

田字有題



東牖子卷之一

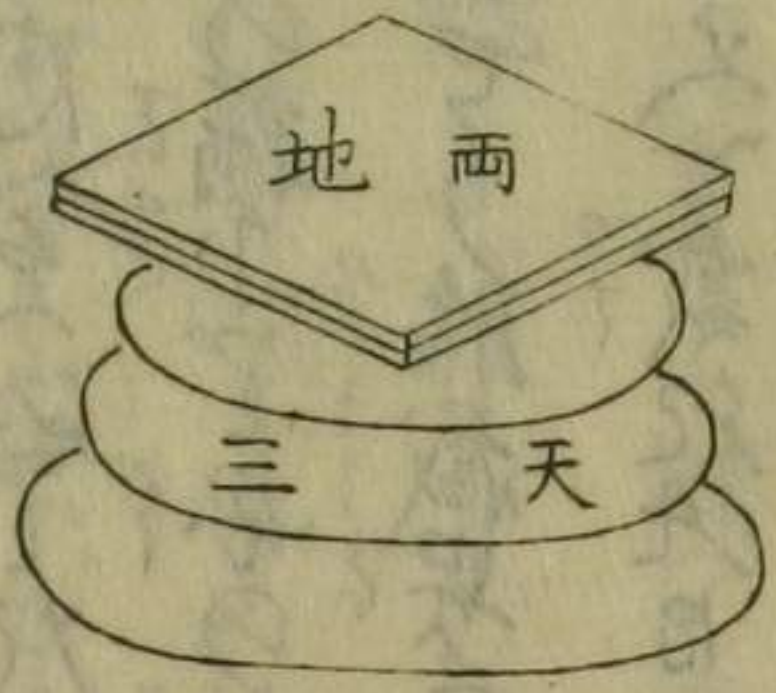
田仲宣著



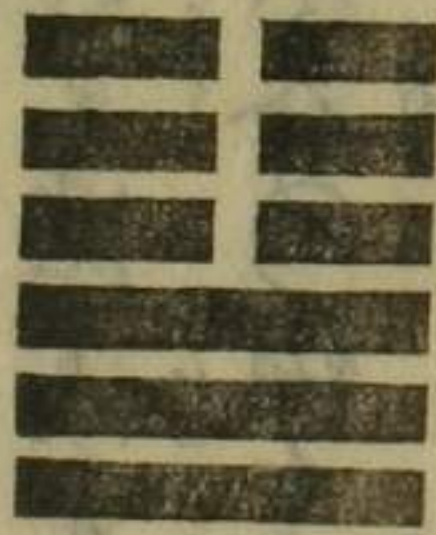
堯風蕩々舜日照々今未古往也
わいて昇平の化不後る氏乃
のそと志さつたと昔素門の書
おのとも有伝くの述懐を
人愈これとんどの今や竹の
と思へば復古の事後古の事
擬古あふべしといふも嗚呼
りや是しとのいふ一とて
堯風蕩々舜日照々今未古往也
わいて昇平の化不後る氏乃
のそと志さつたと昔素門の書
おのとも有伝くの述懐を
人愈これとんどの今や竹の
と思へば復古の事後古の事
擬古あふべしといふも嗚呼
りや是しとのいふ一とて

乃く地を以て一也一也と云はれりて篤く質を以て
 して正一各親矩ありて後世に法と次正日月小神明の法と
 後倭の形を以て天西北象内天の圓なる象小鏡と擬(地の方
 かる象小鏡の解と作る諸鏡は天に比せる物を下に並く
 爰の併れ地は亦せ内を以て象を並く別地天泰と次
 放よ日月と泰月と云泰後と云を月と云と天地の
 交泰して和(睦を睦月と云親睦の睦りの元来天地の
 和利小倣(一)あり下り云々の親睦はれしむるを以て
 月とのもいへるを才二義の鏡なりと云地天泰配道の教
 一致の圖たのどし

天地泰圖



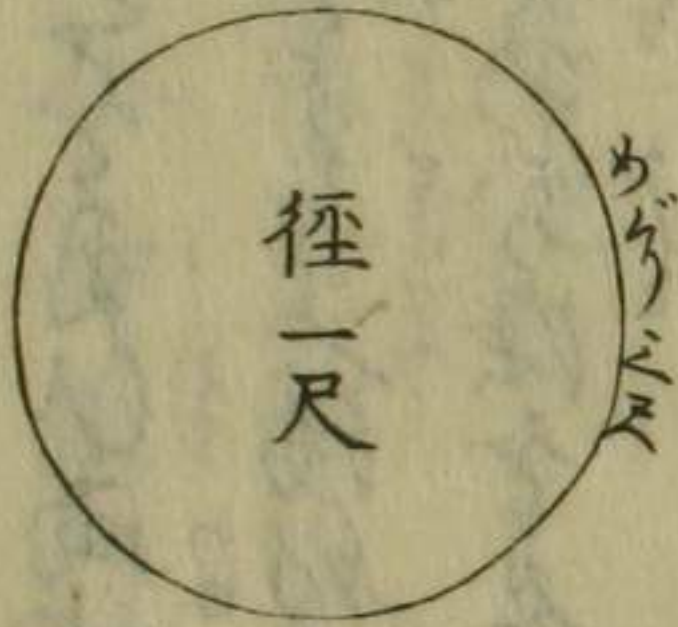
天地泰



金剛大日印



天



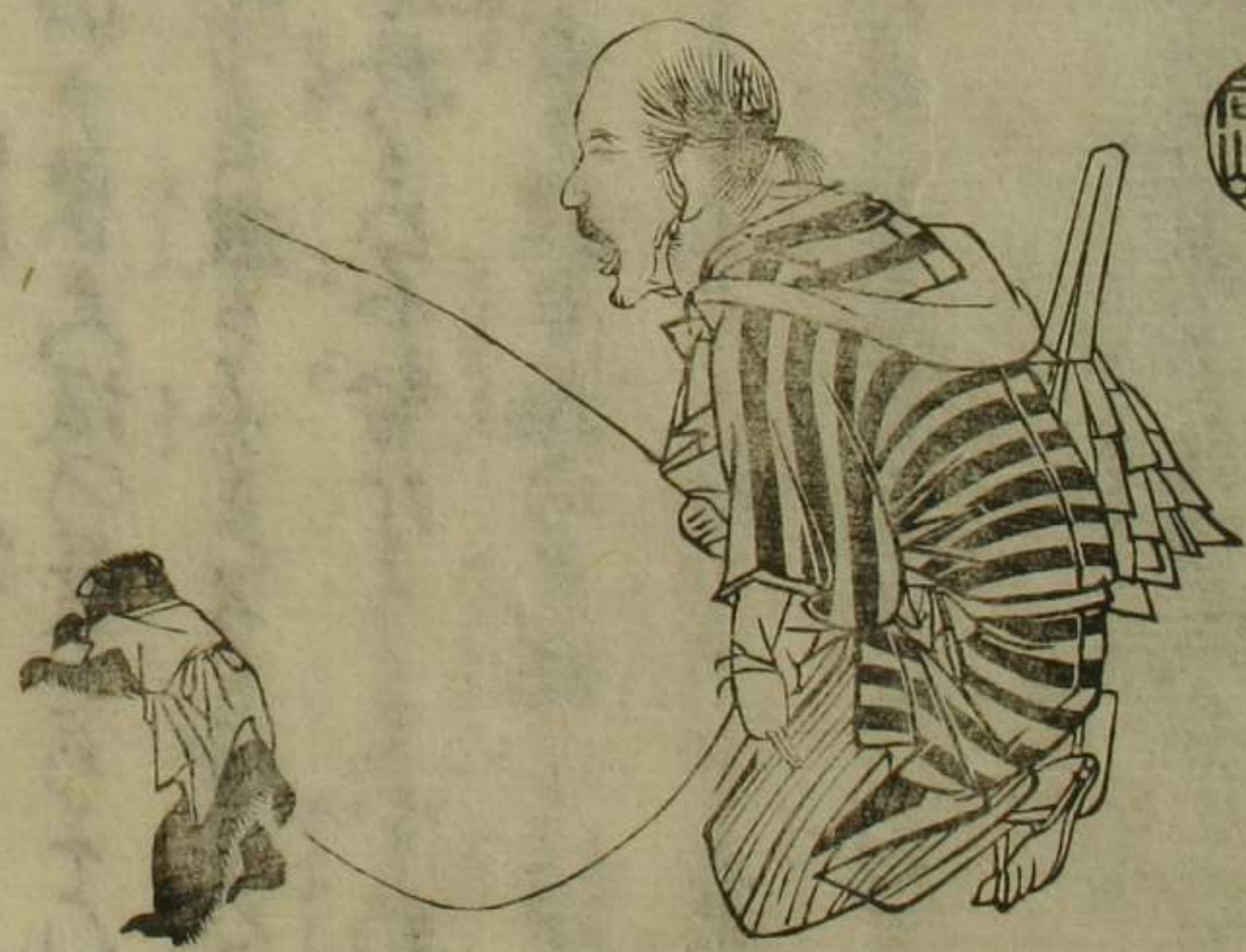
地



天の湯に以て外の教と云
 地の法に以て内の教と云

易一と成てこと画と云す教にを越と云を画と偶教各圖
 と云く知れべし夫が躬の風俗小思出せりて六日月小生爰
 と利これに六日密と云て親戚朋友に交候と備る此教別

法眼周峯寫



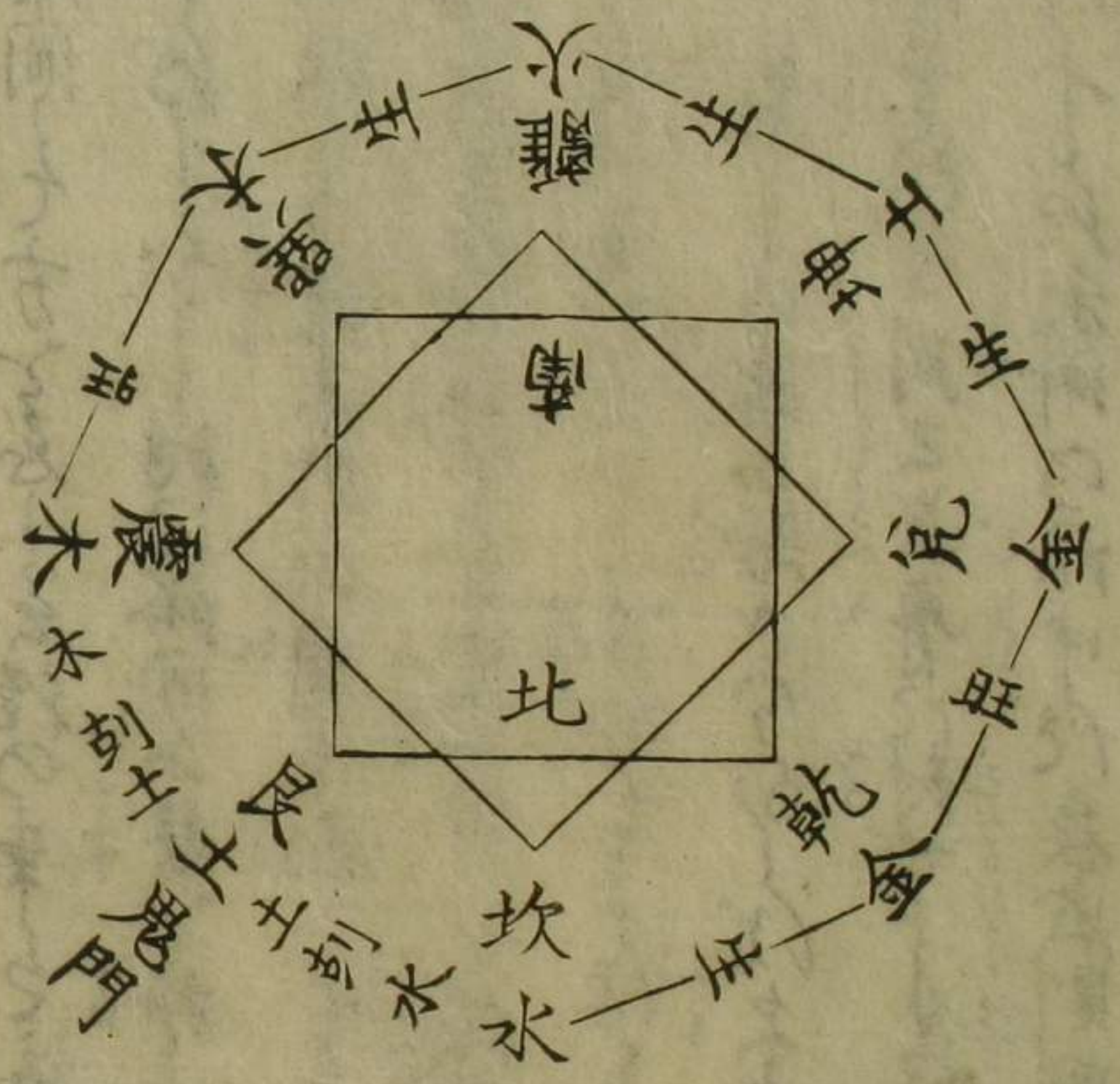
道はて作はひ一切莫大なりして聖徳太子と号せら
る所あるはよき後命人親王太子の大綱領たる日本書紀
と著作一編は後ら崇道蓋致皇帝と号せり
是以神道の考れと以門の天國の法にして櫻庭の胡夷抄
の人か後と神祇の義利天壤のたぐひかりまきとす

○古依日記より元日の料より先とてあそを酒とすゆは
るより一つして荒海布と年の初食とすと之れと宅
今を後南都の氏俗元之の食物ありとす牛房とを
印しは煮くめ牛房と号する母を殺したり
省の送風を梅とす海布とす之の後ふくはあま

之ぶらて牙とすはよしよして考らるの牛房部の社和
布州の神夏と元朝の寅月知りるは近國寺とすあり
いば目もたふとももたふもみふ牙とすはよ
よありと或人の説とす

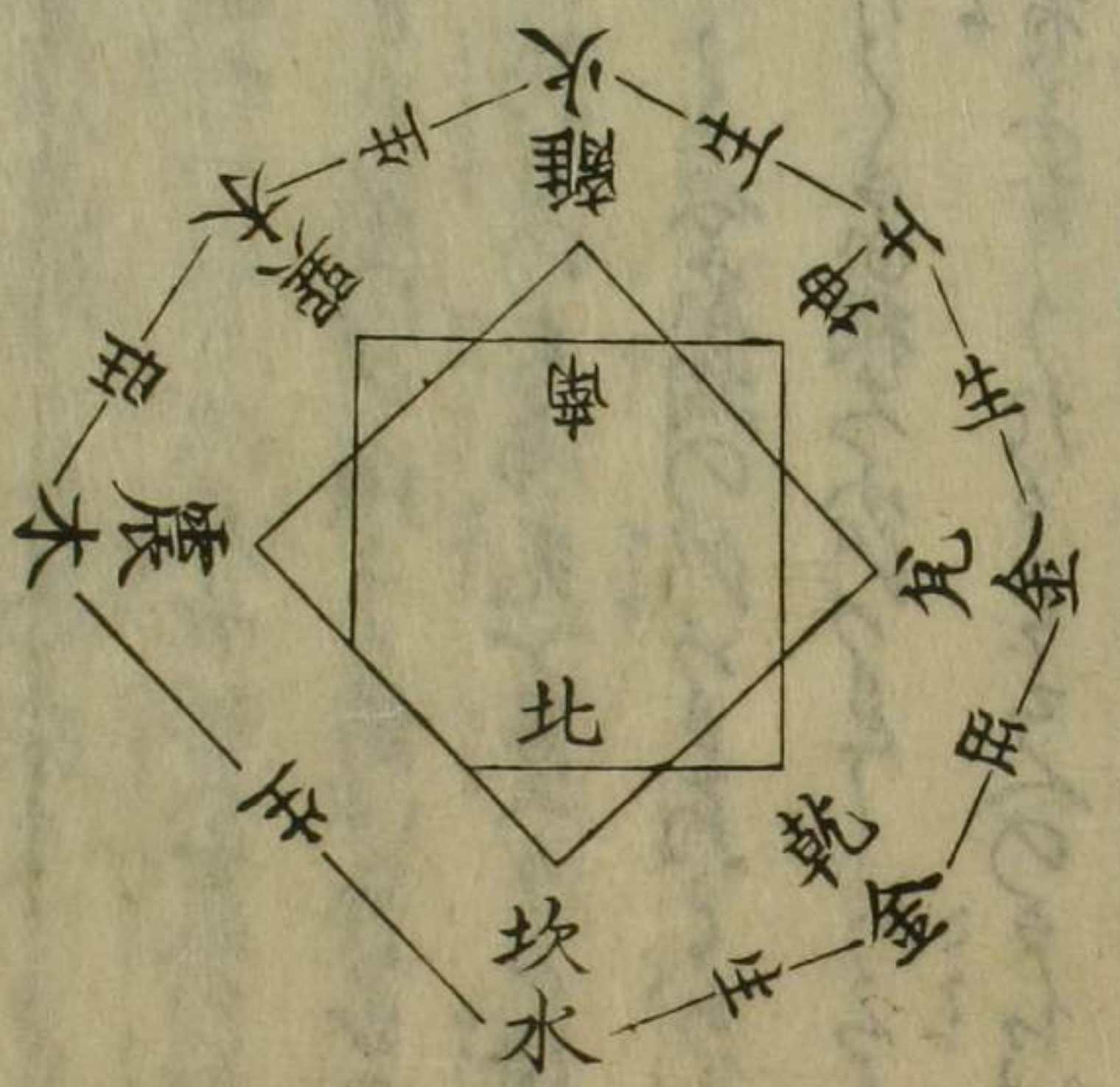
周より今浪花の俗藝送の後は揚とてそ半ふあうと
そ中ふ列とす者ふあふ先を煮て食せりむして荒海布を
西食とすは昔ふはる俗ありら先を元日の食料とありて
めでたれ物なりは町の合物と号するを梅とす枯楊
栞とすは町の埋して死者の後わらわらんを
○若衣初とす日曆のけりふあふあ年始ふれ服更夜と

諸を備へたるに東の方の南と云ふは



震の卦より
 七卦改牙イ
 相生旺とれ
 良れ一卦は後
 則とれこれを
 鬼門と云

右文王后天配當の圖より鬼門の良れ位と云て相生と云る圖也



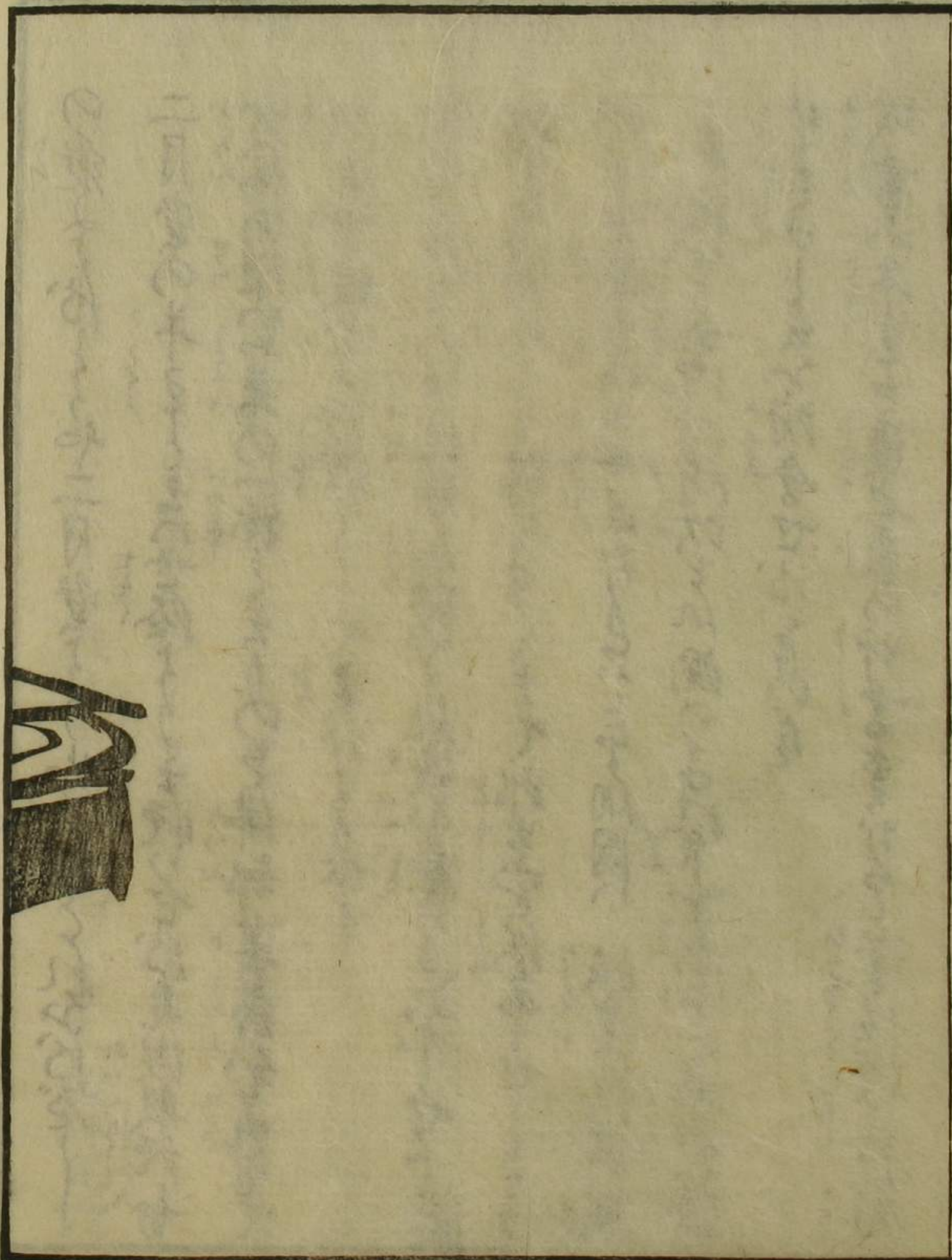
鬼門を云てよれといひは理よりいへるや御書に安んずる有ハ
 欠ゆと及ぶうごはる海を祈らんとて鬼門と云てこれをもて
 竹の蓋り有んを玉溜り水二方へ相刻と云南は水漲りて

と或老僧やうしは礼を音殺して去るは後なりと
 ぞ按とゆふた傳中と天殺と云うは後より所傳とある
 外とて不穿鑿とゆふは清古の文章がふふといふことも
 強きなりと云ふは後よりて鳥或筆乘と云と虫と云は
 虫音也なりと云ふは後よりて船を航に航の音航なりと云
 と云ふは高と高小作の音高滴之蠶と云ふは高と高小作の音高
 腴之美と美は作の美と音美之无と无は作の无の音既之
 本と本小作の音本なりと云ふは後よりて文美なりと云
 むと云ふは後よりて記せり夫清古の人と清古小作なりと云
 清古の文字と云ふは暗小讀者なりと云ふは後よりて字與字彙字貫が

いして字と云ふは書なりと云ふは後よりて夫友都ら文
 字を字と云ふは書なりと云ふは後よりて夫友都ら文
 諸工人高費農氏かんと云ふは後よりて夫友都ら文
 清古の人と云ふは學者の故なりと云ふは後よりて夫友都ら文
 ○諸社諸寺院より半王と云物と云や夫本朝の風俗生
 去の神と云は後よりて初生及清古初發と云は後よりて社本朝と云
 小京都祇園の社と云は後よりて半王と云物と云や夫本朝の風俗生
 女の老嫗と云は後よりてあまひの獲氏ゆ来の子孫といへる
 守護れと受て下向と云は後よりて祇園の神れと半頭天子南海
 の獲氏ゆ来の家ゆ宿を求給と云は後よりてあまひの獲氏ゆ来の子孫といへる

と勝て幸と守らんと清物落あつて一左と右又おはせ去
 子も忌明の社系に無膳して大の字大の字かどとを書い
 あつひの勝も金院のよ乃擬撰おぼべ一叔院の子とて邪
 宗とをさづけ又藤氏の子孫とて夜鬼とて内と怪ひゆ
 かべてのせ去休より神札も次は神号と中に書て左右生
 去室下とてそ瘡去子かた澄とありて邪宗と退くと各
 院の子藤氏の社系かどたかはけりかぼだ一志うを後
 世流りて生の下れ一畫と下の土の字はよた付流くと牛車と
 書しよつといはしう牛車とての書流しとあり
 釋氏梵書と刻て是と下次室下とつづく十面神呪理

の流すおとらや二月堂より出物これおぼだ
 二月堂の牛車とて云い世俗より之便り各内各涅槃經智
 度論の流すおとら一稱とて云いものと佛部菩薩の表書て
 例の方便おとら澄とて実かうとて
 院の子は事の中相國知雅の一夜分歴りておぼせし
 おぼは傳人ども院のよつて邪宗と法書せしより
 邦くと系をの口号ふかると中相國の法書の流すおとら
 して紙を女師の所以とて院の子は下と長とて感神院の
 けとみとてを附會せおとら
 戒書小半とて圖也圖の州書まがると筆法流すおとら

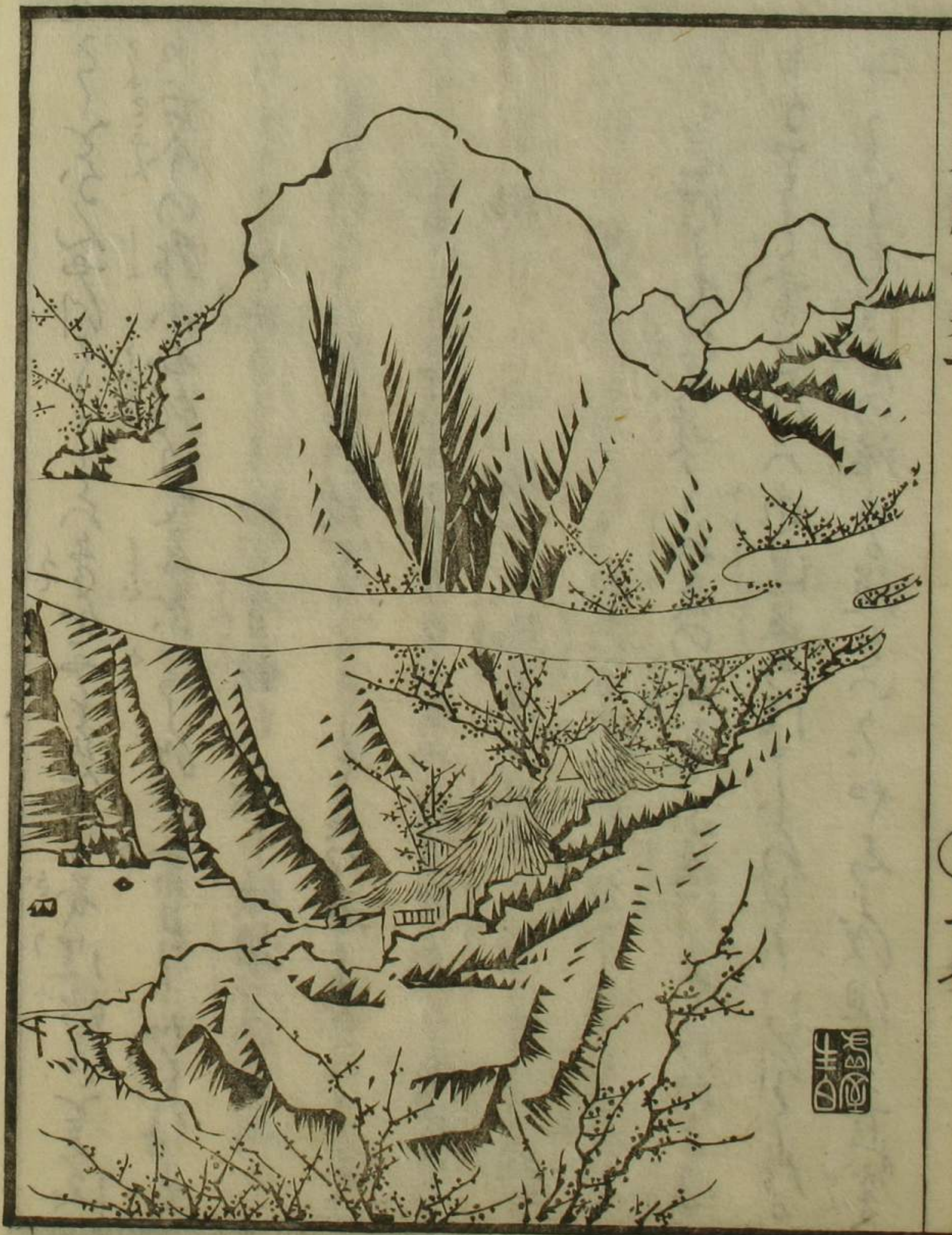


ひまはるの
おに

中へはしつゝ中紀せり物とゞも花のをたより暖い元
 紙湯の愛せる友をたより中へはしつゝ也揚梅桃李乃んか
 りふふして紅白の乾と雛の色象と成りたゞと中へはしつゝ
 紅葉の元湯あゝかゝる友を中へはしつゝ先づこれ人の紙馬
 のしに股しも指より厥冷と内の理ふして元湯を中へ
 却らるをたより中へはしつゝ或曰一大天地の肉よを近有半と
 いうん若く夫林檎梨の類と人家をく食烟くらぶ物
 と菓を結ぶは又揚梅の菓菓のしに食煙のあつ人家
 をたよりは花のしに實のしに種まけてもはくと樹木と
 いふも世の然らざるを中へはしつゝとゞも花のをたより

中へはしつゝ海の間小を中へはしつゝ紅白の元湯あゝゆふ
 花のしに實のしに種まけてもはくと樹木と
 りたひな湯乳十分小盈ある友より花の葉と元湯乳
 の真腹よりのしに湯乳のをたよ貴して里より花の咲き
 蜀葵舞ふるの類の根元より暖よりと中へはしつゝ
 ○この河の國の八橋の半を諸段いろく中へはしつゝ大
 坂の尺橋の板がり圖と中へはしつゝ書たる段の海と中へはしつゝ
 八橋大板の板がりて中へはしつゝ十中満るもの、板小用は物と中へ
 中へはしつゝ物物治小いなる八橋を板と中へはしつゝ又人の字に義理が
 八橋を庭も八橋も中へはしつゝ中へはしつゝ庭中へはしつゝ八橋を庭

壬戌伏日製
九鸞



東塘子

そとそ角の毎にぬもいづの一枝をさへ中肯の古も也
あさうとしかうし書一左うふ返とれど地とねくひを
あを英雄人を欺く返をたよしもわく次

○排潜の排れ字人篇の排の字と書集までたれど排とて夫
排潜の字は清書の侯白傳小見へり今作ふて明板使
漢と改く漢でぬこころは者排の字は改りり蓋歴史の皆
明初と改し不清書むり改りり也既清唐の頃
遣唐使の遊字の排有て稍字法も彼國の例とむら
半多し古今集の排潜とて言篇と書はしとれど
唐初より字俗字通字のを混用ひらりり于祿字

書と見るべし言篇の排れ字は出所正し松上人篇の排潜
とて字用は序の有すれと也後世嗚呼の者有て古今
集の排れ字とも人篇の書改まればもわく改是唐改ら
の書と見よと或人の作らとれ

○神社の神輿と遠く法京師及東國の古制とては花か
西之一夜して照せりりて京師と東の神輿と後をに及ぶ
十六枚撃てゑりり浪花と西のものなむか清書は輿
輿志小玉輅の制有綴り後子と改し見へりこれ小
だけのかりるべしと或人の作らとれ

○十一月と痛月とて半蓋蓋内傳と見へたり同書小

十二月と雪月と申るるがごとく霜月といふはけしきも
雪月と申ふ

○金澤越後守の女子世徳尼とせよ其徳一々尼僧あり
願悟の方と縁もや

やふうくよ一楠の庭むけく水たまたむ月夜宿み
ふん有いづつとのくう徳徳いけん 小世徳がいつく
桶のそこもく徳人より竹下と道公傳りても自己徳
と淡つら廉おちるいづる者ん 巧徳徳ていこの徳徳
どろくもみ 撰史小徳の書かう後一はそいふ世徳尼ハ
美徳の小ね見寺と云ふ小住せられよう一徳寺に傳紀

有てこのやふうふいづるがごとく申るる

○俗間小末の六十日と云半とたるといふと凡本朝の法田畠
き及之百歩の古制也然るに中古より二百六十歩と改ら
をいこれ耕とのよと百六十日の食小配當せし物と云是
中古の制していま及の定間八十歩に十二歩也中古れを
歩俗小末間と云方六尺あり之太右のき歩六尺也これを中
間と云すの差六十歩なり昔并改りて一と凡太右の
制は織女と云とくは後古の半といども思ひがけなく
改法有い六十歩縮つたを氏太にうるとはく末の六十
十日をいづるといふと云やと款りうと云ふん巧る時をも

有^り物^を今^幸に^涯に^恩を^悉に^租税^と莫^大に^定
 く^志給^ひ万^民德^澤に^修て^農夫^をと^び附^油と^結
 農^吸は^ち結^と古^米未^嘗有^の半^ども^なり^おふ^と
 網^也と^て草^の皆^とく^り暑^や管^の小^笠と^看て^耕耨^定
 に^ちお^豊饒^のと^りか^け網^也草^の價^値数^内り^とも^年
 毎^に費^{あり}し^穀子^金亦^及下^夫先^田を^耕者^の水^の慮^{あり}
 湯^田を^耕者^の早^の愁^{あり}に^風十^五は^合を^鳴呼^徭者^の
 子^の富^{あり}半^と知^ば蕃^まの^氏に^政と^分母^はと^是と

ねよだ

東 牖 子 卷 一 終

